



所在地 伊勢原市上粕屋字
秋山 3086-2 番地外

調査期間 令和 2(2020) 年 4 月 1 日～
令和 3(2021) 年 2 月 26 日

調査面積 3877㎡

担当者 小川岳人、岡 稔、小島清一、
粕谷 隆、中村淳磯、村松 篤

調査概要

調査は一般国道 246 号線（厚木秦野道路）建設事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査として実施しました。遺跡は、上粕屋扇状地の北縁、扇端部に位置し、渋田川支流が開析した谷に面します。本遺跡ではこれまでに新東名高速道路建設事業に伴う調査、厚木秦野道路建設事業に伴う調査が行われてきました。今回の調査区は第 2 次調査 4～6 区に該当し、令和元年の 11 月に着手した調査からの継続となります。

令和 2 年度の調査は、近世、中世、奈良・平安時代、縄文時代、旧石器時代の各時代にわたる遺構・遺物を発見しました。

近 世

調査区内を縦横に伸びる大小の溝、段切り、井戸跡、土坑・ピット等を発見しました。

これらの遺構からは 16～17 世紀の陶磁器が出土しています。当時の屋敷地が展開したものと思われます。注意を引くのは、5 区の現道路下から発見された石敷きの道状遺構です。現道路が南側の谷戸に向けて坂道になった箇所の下から一抱え以上ある大きな石が幅約 2m



第 1 図 調査位置図 (1/25000)

長さ 7m にわたって検出されました（写真 1）。埋め込まれていた石の中に近世の墓石未製品と考えられる切石があったことから近世後半以降の遺構としましたが、後の時代に補修された可能性もあり、厳密な所属時期はなお検討中です。この遺構が発見された箇所は糟屋館の「大門」の伝承がある切り通しに接し、遺構の性格を含めて、注目されます。

中 世

4 区で地下式坑、調査区の各所で溝・ピット、を発見しました。地下式坑は調査区南の谷戸側に位置し、C1 号・C2 号地下式坑が単室、C3 号地下式坑は一部壊されていましたが複室とみられます（写真 2）。遺物は C1 号地下式坑の床面直上から瓦器の香炉が出土しています。溝・ピットは中世前半代の遺構と思われます。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては、5 区で 10

世紀代とみられるカマドが1基発見されています(写真3)。カマドは礫を立てて燃焼部を囲ったもので、竪穴住居に伴う施設と思われますが、明瞭な竪穴の掘り込みは確認出来ませんでした。

縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は、縄文時代中期・後期が顕著です。後期の住居跡は、4区で称名寺式から堀之内1式・2式までのものを11軒、5区で加曾利b1式のもの1軒確認しました。

後期の遺構で特筆されるのは4区の中央部で発見された堀之内2式末～加曾利b1式期に属するとみられる配石群で、一部に土坑を伴い配石墓と考えられます(写真5)。またこれら配石群に先行する堀之内式期の土坑墓群も発見されました(写真6)。配石群・土坑墓群の遺構確認面はローム漸移層に相当し、周辺では縄文時代中期～後期の層が認められません。このことから、配石・土坑群の構築に先立ち、ローム漸移層上面まで的人為的な削平が行われた可能性が高いと考えられました。また、配石群と土坑群の所在する箇所は縄文時代中・後期遺物の分布が極めて僅少なうえ、比較的平坦な場所でもあることも人為的な削平が行われた傍証となるでしょう。

中期の遺構は、中期後半の加曾利E3式(曾利3式)期を中心とするもので、住居跡は4区に4軒、5区に5軒、6区に12軒と、5区、6区を中心に今回の調査区全体に分布しています。特に6区の集中は顕著で、中期の集落は後期よりも台地の奥側に中心があったと考えら

れます。

また6区の中期竪穴住居跡からは、床面に人骨が集積された状態で出土しました(写真7・8)。この人骨は現在なお分析を進めているところですが、焼骨後に住居の床面に並べるといふ複雑な過程を経ていた可能性が指摘されています。伊勢原のような内陸での縄文時代人骨の出土はそれだけでも貴重ですが、当時の葬法を考える上でも重要な資料となりました。

遺物は中期・後期の土器を中心に膨大な量が出土しています。縄文時代後期では土器・石器に土偶・石棒などの祭祀具・玉類等が伴っています。図3の左・写真9は土偶です。残念ながら顔の部分を欠いていますが、平塚市王子ノ台遺跡出土の中空の大型土偶によく似ています。図3の右も土偶の頭部です。所謂「仮面の女神」に代表される中部高地の土偶頭部に近似します。写真10は縄文時代中期の釣り手土器の出土状況です。ほぼ完全な形で床面から出土しました。

旧石器時代

遺物集中が発見されました。旧石器時代の調査は令和3年度に継続しています。

まとめ

上粕屋・秋山遺跡の調査では旧石器時代～近世に至る遺構・遺物が発見されています。特筆されるのは縄文時代中期・後期の成果で、ともに当時の社会や精神世界を考えていく上で貴重な発見がありました。今後は近隣の集落遺跡の調査事例との比較を通じて、分析を進めていく必要があります。(小川)



写真1 近世石敷道状遺構（北から）



写真4 縄文時代後期 敷石住居跡（南から）



写真2 中世の地下式坑（北から）



写真5 縄文時代後期 配石群（東から）



写真3 奈良・平安時代カマド（南から）



写真6 縄文時代後期土坑墓群（北西から）



第2図 調査範囲図 (1/300)



写真7 縄文時代中期竪穴住居跡（北から）



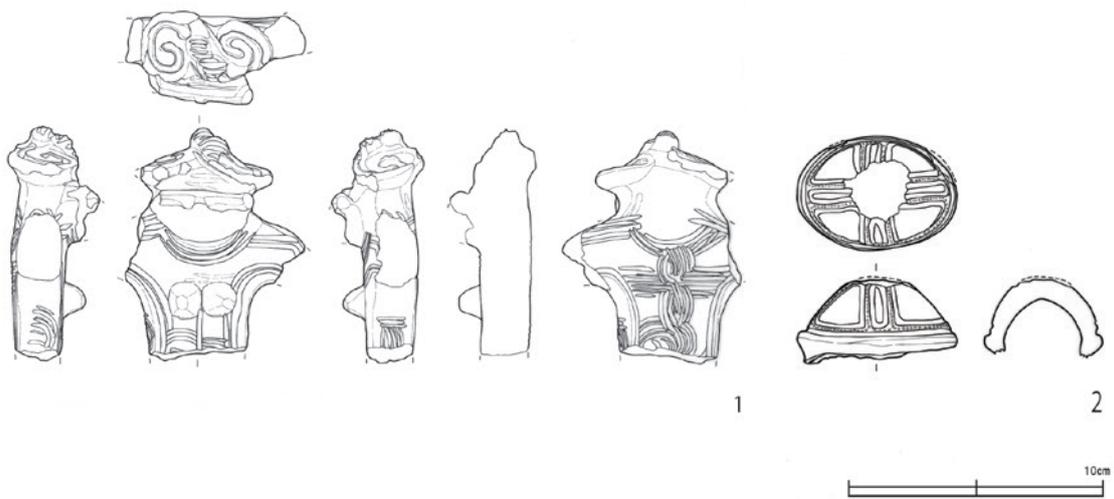
写真9 土偶出土状況（南から）



写真8 竪穴住居跡からの人骨出土（東から）



写真10 竪穴住居跡からの釣り手土器出土状況（南から）



第3図 出土土偶